

## その他

### 敗戦で強制送還されるまで

東京都 大谷 行 巳

私は昭和十二年四月二十五日、大阪商船「しかご丸」でフィリピンの首都マニラに着いた。マニラには、実兄がいて、同市唯一の邦字紙「マニラ日日新聞」の主筆をしており、私は学校を出たら、同社に入ることになっていたのである。

翌五月一日、私はサンバロク区レパント街のマニラ日日新聞社に入社し、編集部勤務となった。

日本では満州事変勃発以来、五・一五事件や二・二六事件が起こり、日増しに軍国色が強まっていたが、

マニラは明るく平和で、自由だった。

しかし、十四年から十五年と「日支事変」が拡大するにつれ、華僑の多いマニラでは華字紙が連日「日本軍の暴虐」を大見出しで報じたり、現地の英字紙にも日本非難の論調が多くみられるようになった。

十六年十二月八日、この日、約五千人のマニラ在留邦人はかねての打ち合わせどおり、日本倶楽部や日系企業の社宅などに集合した。が、私はなぜか日本の商社、銀行などの支店長ら二百数十人とともに、マニラ南方数十キロのモンテンルパの刑務所に抑留された。

同月二十八日、私たちは解放され、全員バスでマニラの日本人小学校に帰った。ルソン島に上陸した日本軍が南地からマニラに迫り、米比軍はマニラを「オーブン・シティー」にしてバターン半島に退いたからで

ある。

一月二日午後、日本軍はマニラに入城した。在留邦人は日本人会の指導のもと、食糧の買収から野菜栽培、通訳など、それぞれ特技を生かして軍に全面協力することになった。私は新聞記者として、軍報道部の囑託になり、広報任務にたずさわった。

十九年に入ると、食糧や生活必需物資が欠乏、また南方諸地域での連合軍の反攻激化から反日ゲリラが各地に出没し、治安は日に日に悪化していった。

十月以降、在留邦人のうち、四十五歳以下の男子は全員現地召集され、老人婦女子には北部ルソンへの疎開が勧告された。

私は十月一日、マニラの南方第十二陸軍病院に衛生兵として入隊した。

翌二十年一月七日早朝、私は残務整理に当たっていた高山大隊の一員として、バギオの本隊に合流すべくマニラをたつた。昼間は米軍機に見つかるので夕方から、大八車に荷物を積んで引っ張り、夜通し行軍するのである。

こうして二十日間余、私たちは二月初め、バレテ峠を越えて北部ルソンのアリタオに入ることができた。しかし、バギオもすでに危機に瀕していて、本隊への合流ができずにいたところ、バンバン地区、兵站監によって同地区の警備を命じられた。

五月末、鉄兵団の善戦にもかかわらずバレテ峠は陥落。六月初め、米軍はなだれをうってカガヤン河谷に進入してきた。

六月八日だった。バンバンからアリタオに出て陣地構築にあたっていた私たちは、何十台もの米軍戦車が国道五号線を一斉に北上しているのを見た。部隊はあわてて午後、反対側のドバックスに退避をはかったが、米軍の迫撃砲に捕捉され、大損害を受けた。

白昼、米軍の目前を一列縦隊で山道を登るのだから、当然のことだったろう。夕方になり、観測機が去り、迫撃砲がやんだ。私は吹き飛ばされた木の枝や土石の中から立ち上がった。どこにもけがはなかった。

以後、私は辺りにいた三十人ほどの兵隊と一緒に行動した。コンコン溪谷に何日もいて休養し、食糧を集

めた。そしてカシブに出て、鉄兵団の生き残りが歩いたとみられる跡をたよりに、カガヤン川、上流から人跡未踏の山中に入っていったのである。

何日か必死で歩いた。そのうち、私はマラリアが再発して動けなくなった。食料もなくなり、もうどうにもなるものではない。山腹の水の出るところに携帯天幕をかぶって、一人で寝ていた。と、頭の上で人の声がした。

兵隊が三人いて、私を見ていた。そのうち一人が、小さなサツマ芋を袋から出してくれた。ナマのまま、私は食べた。三人は近くの畠で掘ったといった。

話しているうち、この三人は鉄兵団の生き残りで、しかも私と同じ鳥取県八頭郡の出身だった。鉄兵団は兵庫県姫路の第十師団だったのだ。

三人はまた、貴重なイモを少しずつくれ、一緒に山を出ることになった。彼らの中にもマラリアで苦しんでいるものが出て、かばい合いながら歩いた。

山麓にやはり鉄兵団の兵隊が数人いて、川に手榴弾を投げて魚を取っており、「戦争はもう終わった。自

分らは明日、米軍のいるところに出る」といった。

私たちがエチャゲの米軍キャンプを経由、カンルバンの捕虜収容所に入ったのは九月二十七日だった。

十一月一日、私は日本送還のため、呼び出された。

各キャンプから集まった数百人の捕虜は無蓋列車でマニラに向かった。沿線の住民が列車に駆けより「パタイ（死ね）」などと口ぐちに叫び、石を投げた。

戦前、在留邦人はフィリピン人と軒を並べて住み、仲良く暮らしていた。フィリピンを愛し、そこに骨を埋めるつもりだった。当時の在留邦人のままだったら、こんなことは言われなかっただろうし、「強制送還」にもならなかっただろう、と思った。

## あ！ 南十字星

東京都 市川 正子

私は、南方航空輸送部に勤務していた。半官半民の輸送部は、直接、戦闘に加わらず、後方部門として陸